

読者投稿

幻のターンノイ・コーネッタの実現

オートグラフを思わせる豊麗な響き

松波 濤

幻のコーネッタを聴くために上京

今日は待ちに待った「幻のターンノイ・コーネッタ」とステレオサウンド試聴室で対面できる。二月二十日、午前九時三分。街並の向こうに朝陽に輝く海が見える新神戸駅で、ぼくも乗った「ひかり号」は東京へ向かって静かに発車した。

長年抱いていたぼくらの夢が、まじうは現実のものとなる。ぼくの胸は期待にはぎんぐでいた。オーディオのことでこれほど身体中の血がさわぐのは、ほんとうに久しぶりだ。ぼくにとっては、まじうはまるで海外留学していた恋人に何年かぶりで逢いに行く……といった感じなのである。

どんなスタイルになつたらう。どんなに美しくなっているだろう……。ぼくは少年のように想像の翼をいっばいに拡げていた。

ぼくの寝書がきっかけで、ターンノイ・コーナートエンクロシニア(ぼくのいうところの「幻のコーネッタ」)を「アイ・ハンディクラフト」欄で取り上げることにした。という、本誌編集長からの手紙を受けとったのは、昨年の十一月初旬だった。ぼくははかばかして喜んだ。さすがに「ステレオサウンド」の編集部だけのことはある。ぼくの気持ちをよくぞ汲んでくれた。ぼくの眼には狂いはなかった、などと都合のいい解釈をしたものだった。手紙を受け取って以来、発売日の十一月末までの長かったこと、毎日の仕事が手につかぬくらいだった。編集部の方には何度も発売日の問い合わせをして、ご迷惑だったろうとおもって。

翌号にはぼくの寝書が掲載されて、面映り気配がしなくなったが、ぼくの「幻のコーネッタ」を実現するために、井上先生と編集部が腰を上げてくださったことを読んでぼくは感激した。

しかし、翌号を読みかえしているうちに、ちよつと心配になてきた。それは井上先生が具体的なことは触れられて、しかも「幻のコーネッタ」を裏切るのは大変むずかしいテーマのおおしやつてゐるからだ。それに「幻のコーネッタ」は、もとより素人のぼくが夢に画いたものである。技術的にも可能性のあるものかどうが、ぼくに見通しのあるわけはなく、本誌ターンノイだつて、こんなものは考へてもみないことだろう。井上先生の「現在はまだどうなるのやら、五里霧中の状況である」という最後のくだりを読むにいたつて、ぼくはますます心細くなつていった。

いよいよ「コーネッタ」と対面

「幻のコーネッタ」のことをいろいろ想像しているうちに、ぼくの乗った「ひかり号」は定期通り東京駅に着いた。駅には原田編集長と編集部の皆さんがわざわざ出迎えてくださった。ぼくは恐縮した。まっすぐ六本木のステレオサウンドに案内され、昼食をいただいたのち、いよいよ「幻のコーネッタ」との対面となった。

ステレオサウンド試聴室は7階の編集室と同じビル3階にあり、ぼくはそこに運ばれた。

白木づくりの曲がるいぶき(向コーナート)に、夢にまで見た「コーネッタ」が鎮座していた。ぼくは一瞬息をのんだ。どうしようとした。

「コーネッタ」はまじうことなるターンノイの姿でぼくを待っていた。サラネットもターンノイ製のものだし、チーク材の仕上げとその彫削も、まさにターンノイである。全体のプロポーションもとてもいいバランスだ。さらにサラネットを外して見せてもらった。ぼくは感嘆した。中音ホーンはこの出来栄にははじめて、れっきとした本格的なホーン付きた。エンクロシニア

アの造りも緻密である。これならターンノイも脱帽だ。エンクロシニアを叩いてみる。ボンボンと共鳴するところがない。かかえつけてもなうと思つたけれど、とても一人では無理だ。エンクロシニアをあけて中を見せてもらつて、さらにびっくりした。

これは凄い。本当に素晴らしいものを造つてくださった。音を聴かないうちに、ぼくは有重点になつていった。顔ははてつてくる動線は早くなる。ぼくは「もつと落ちつけ、落ちつけ」とつぶやいていた。

試聴室には「コーネッタ」のほかは、「コーナート・バステラ型」(コーネッタから中音ホーンを省略したもの)と、密閉箱のオリジナル・ターンノイⅢLZ/MK II、それに新しいユニット、295HPDをタケテットポット型の箱に入れた「CHEVENZIG」の計四種類が設置されていた。

ステレオサウンドの試聴室は初輪ぼくは初めての訪問でもあり、聴き馴れたⅢLZオリジナルと「コーネッタ」を比較試聴できるのはたいへんありがたいことだった。

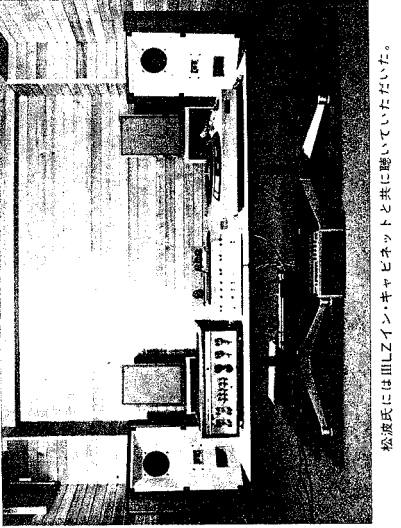
コーネッタを聴く

さて、いよいよ「コーネッタ」の音を聴ける時がきた。

試聴は、まじうつとよきなしみのあるⅢLZ/MK IIからはじめる。アンプは本誌で、黄金の組合せといわれたラックスのS028PD。カートリッジはエレクトロアクシス・テイクスSRTS455。

レコードはぼくが持参したものと、ステレオサウンド試聴室に備へてあるものの中から選んだ。

ⅢLZ/MK IIは今まで聴いていた感じよりいくぶん響きか豊かで、良い感じで鳴つた。おそらく部屋のせいだろう。ぼくの経験した販売店の試聴室よりは



のⅢLZの方が、こと量感に関しては是さそうに感じる。

ぼくはどんなジャンルのレコードでも聴くが、中でもクラシック音楽、とくにオーケストラものが好きで、あの管弦楽の華麗な響きや色彩感、そしてフルテンキでホールが鳴りわたる、という感じがスピーカーから出ないと気がすまない。ホールの特等席でオーケストラを聴いている感じがほしい。耳に聴こえるだけでなく、身体で感じる量感がほしいのである。ぼくのいう量感とは音だけ大きければいいというものではない。それだったら、何もターンノイⅢLZにする必要はまったくない。いくらでも優秀なスピーカーはある。ぼくはターンノイのあの気品ある音色でその量感を得たい。それならⅢLZではなく、15時のオートグラフにすればいいではないか、といわれそうだが、ぼくは朝野にも書いているように、部屋の大きさ(八畳)にくらべて、スピーカーが大きすぎるのは嫌いだ。これはぼくが所有の生活空間におけるバランス感だ。幸をよくするためにはどんな犠牲でも払う、というのにはぼくにはない。あくまで生活空間のバランスを保ちながら、その中でベストをつくしたい。だいたい八畳の部屋にオートグラフを置いている図を掲載して下さる。椅子にすわつてレコードを聴こうとするぼくも、オートグラフは見おろして、音を上の方から降らせてくるでしよう。そんな感じがぼくには辛抱できないのだ。話は横道にそれてしまった。

いよいよ「コーネッタ」が聴ける。待ちに待った。隣である。もし、その音が万が一にも悪かつたら……自宅で聴いているⅢLZとあまり変わり映えしなかつたら……ぼくの中で期待と不安は交錯した。

「コーネッタ」は鳴つた。ついに鳴つた。最初にかけたハイインク・ベトル・エンカの色

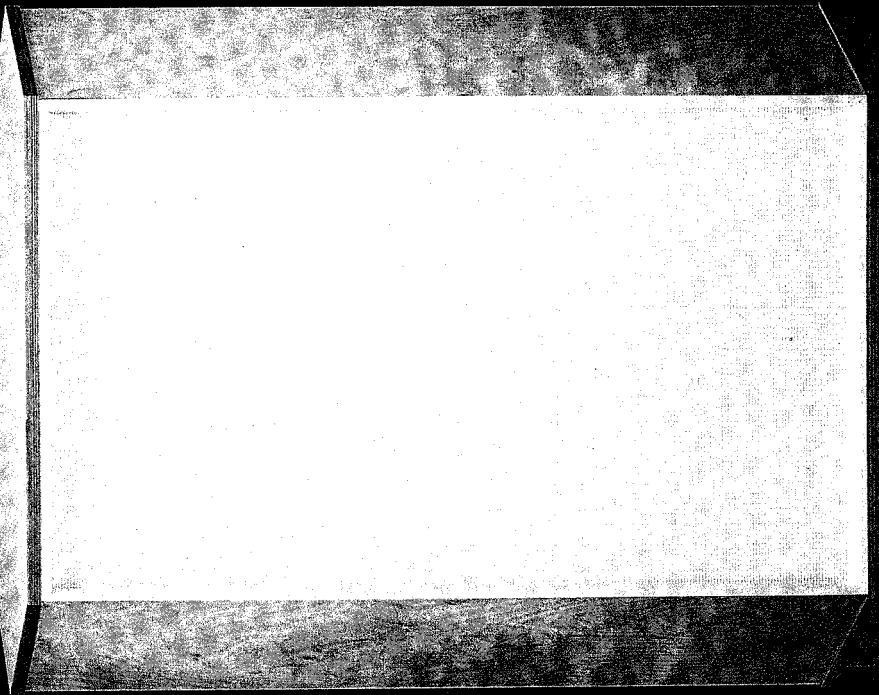
るかに皆に厚味があり、部屋がいかに大切かを知らされた感じである。

次に295HPD入りのCHEVENZIGを聴く。MK IIより低音・高音ともに良く伸びる感で、華やかに鳴る。オーケストラ曲の色彩感など、良く出してくる。やはり新しいユニットだけあって、明快な音である。

しかし、両方のシステムともに、良い鳴るという感じながら、どうしてもアックシエルフ・タイプのスピーカーにありがちな、低音域の量感を無理して出そうとしているように聴こえる。これは翌号の寝書にもふれた通りである。これだと、現在ぼくが自宅で聴いているグッドマンAXIOM80用エンクロシニア入り

MP HANDBRAFT

マイハンディクラフト
 タンク10"ユニット用 井上卓也
 コーナール・エンクロージャをつくる



感とダイナミックな音。圧倒的である。これがタンクノイの295HPDから出さずばならぬ。だが信じよう。ブックシェルフタイプにありがちな、あの無理して出してくる低音とは次元のちがうスケールの大きさである。10吋ユニットとは決して思えない。朗明とした響きである。それに更に厚味が加わり、オーケストラの人数が増えたと感じる。とりわけ、音のひろがり、奥行き感が奥行きに出てくる。カラヤン/オネロなど、まるで響きを見ているようだ。リヒター/王宮の花火の音楽、ハイテイク/オナイコフスキ/交響曲第五番、ハイフエツツのアルプス/グアイオリン/コンチエルト、ロス・アンヘレス、アン・バートンなど、どのレコードも素晴らしい。

幻のコーネッタ。はついに幻ではなくた。現実の「コーネッタ」は、最早に音楽を奏でたのである。知人宅でよく聴かせてもらう「オートグラフ」と音の整調が、つまり音のひろがりとか奥行き、定位感、全体の質感など、ほくには同じように聴こえる。「オートグラフ」よりはほんの少しスケールを小さくした感じなのである。そうだがこれは「ミニオートグラフ」だ。心の中で喜びながらほくは夢中になってレコードをかけた。

本格的な設計になる、タンクノイのコーナール・エンクロージャに入れた295を聴いて、ほくは驚愕にあらたれた井上卓也先生、それに三菱電機出版制作部スタッフの「技術」の確かさと偉大さを知った。ひとつのユニットの可能性をこうまで高めることができる技術。これはほくのようにレコードが好きでオーディオに入った人間にとっては、まるで魔法のように見える。ほくは今からでも遅くない、勉強しないといけない、ということも教えられた。

コーネッタ。試験のあとは、コーナールベース型

を聴いた。これは「コーネッタ」にくらべて中音ホーンがなければだが、音場空間の再現性がまるでちがっている。音場正面になつてしまうのである。まきほど聴いた「コーネッタ」のひろがりや奥行きがどうしても出ないのだ。

中音ホーンというものが、こんなにも見事に音場を演出するのかと、ほくは自分の耳を疑った。ここで思いついたのは、「オートグラフ」のあの独特な臨場感、ひよつとすると、あの中音ショートホーンの効果も知れない、ということだった。

そのあと、鳴らしてはたックスのアンペアQUADのプリと並着の405というハイアンペアにかえて、再び「コーネッタ」を聴いた。ほくはここでさらに驚しくなった。音が締まってきたのである。音楽の細部がよく聴こえるようになり、緻密になった。ブックシェルフ型のタンクノイだと、SQSPDでも結構良いのだが、「コーネッタ」になると、QUADの方が断然いい。ほくは天にも昇る心地とはこういうときのことだろうかと、などと考えるながら、レコードをかけかえていた。

*

約三時間にわたる試験を終えて、ほくはいまさらながらタンクノイ・ユニットの実力を知ることになった。295や田LZのためにこれほど立派なエンクロージャはメーカーでは絶望に逢えないはずである。ユニットにくらべて箱が高価につきまざるからだ。こんな立派な箱に入れても、なおタンクノイは見劣り、いや聴きおとりしなかつた。箱を良くしただけ、音もよくなつていった。そのことにほくは驚心してしまつたのだ。と同時に、オーディオ趣味は好きなパーツをどこどこ使いこなす、そのことに真の喜びがあるのだ、ということも教えられた。

それにしても、このエンクロージャは工作がむずかしい。中をあけて見せてもらつてわかつたのだが、とてもほくが造れるような代物ではないのである。しかし、二でひるむことはできない。「コーネッタ」の音を自分のものとするには、なにがなんでも造らねばならない。

下り「ひかり号」の最終に乗つたほくは、いままで編集部から頂いた「コーネッタ」の図面とにらめっこしながら、その工作の困難さに立ち向かう自分と、やがて、わが家へ鳴る「コーネッタ」の音に思いをめぐらしていた。

●今号では「中音ホーンつきコーナール・エンクロージャ」の詳細な図面を掲載する予定でしたが、今号のエンクロージャをそのまま製作するというのは、まわめて困難であると編集部で判断しました。そのため、現在のものをもっと近寄りやすとした「中音ホーンつきコーナール・エンクロージャ」をもう一度製作し、本号に掲載する予定です。その時には、295HPDユニットはかりでなく、田LZコーナール・エンクロージャの試験結果も併せて掲載するつもりです。

●今回の「マイ・ハンディクラフト」では、三菱電機出版制作部のご協力をいただきました。誌上をかりて厚く御礼申しあげます。編集部

ついに完成した「コーネツタ」の音はどうか 期待を上廻るフロントホーンの偉力、 いまだ衰えぬIII LZの魅力

試聴は例により、ステレオサウンド試聴室でおこなうことにする。用意したスピーカーシステムは、今回の企画で製作した「幻のコーネツタ」、つまり、フロントホーン付コーナリ・パスレフ型システムとコーナリ・パスレフ型システム2機種で、それぞれ295HPDユニットが取り付けられている。また、これらのシステムとの比較用には、英タンノイのIII LZイン・キャビネットが2モデル用意された。一方はIII LZ MK II入りのシステムで、もう一方は英国では「CHEVEZZO」とよばれる295HPD入りのシステムである。

試聴をはじめて最初に感じたことは、2種類の英タンノイのブックシェルフ型が、対照的な性質であることだ。

まず、両者にはかなり出力音圧レベルの差がある。それぞれのユニットの実測データでも、295HPDが出力音圧レベル90dB、III LZ MK II 93dBと3dBの差があり、聴感上でかなりの差として出るのも当然であろう。それにしても、295HPDの出力音圧レベルは、平均的なブックシェルフ型システムと同じというのは、HPDになりユニットが大幅に改良されていることを物語るものだろう。

第二には、III LZが聴感上で低域が量的に不足

し、バランスが高域側にスライトしているのと比較し、295HPDでは低域の上制あたりがやや盛り上がったような量感を感じさせ、高域にある種の輝きがあるため、いわゆるトンシャリ的な傾向を示す。しかし、質的にはIII LZ MK IIのほうが、いわゆるタンノイの魅力をもっているのはしかならない。量的には少ないが、質的にはよく磨かれている。一方295HPDでは逆に、とくに低域が豊かになっているが、ややソフトオオカス気味で、中域から中高域の滑らかさが、III LZ MK IIにくらべ不足気味に聴える。

次に、295HPDの入ったオリジナルシステムと、今回製作した2機種とでは、当然のことながらブックシェルフ型とフロア型の間にある壁がいかに大きいかを物語るかのようになり、少なくとも比較の対象とはなりえない。同じユニットを使いながら、この差は単でいえば、ミニカーと2000ccクラスの車との間にある、感覚的な差と比較できるものだ。まったく両者のスケール感は異なり、やはりフロア型の魅力は、この、ゆつたりとした、スケール感たっぷりの響きであろう。

2種類のコーナリ型システムは、フロア型ならではの伸びやかな鳴り方をするが、予想以上に両者の間には差がある。

フロントホーン付コーナリ型は、低域がよく伸び、中低域あたりまでの量感が実に豊かであり、とても25cm型ユニットがこのシステムに入っているとは思われないほどである。また、高域はよく伸びて聴えるが、中域の密度がやや不足し、中高域での爽やかさも少し物足りない。ただ、ステレオフォニックな音場感、突然に部屋が広がったように拡がり、とくに前後方向のバースペクトタイプの再現では見事なものがある。音質はやや奥まっつて聴えるが、くつろいでスケール感のある音楽を楽しむには好適であろう。聴感上のバランスではやや問題があるが、ステレオフォニックな拡がりの再現に優れている。

一方、コーナリ型では全体に線が細い音で、中域の厚みに欠けるために、ホーン付にくらべかなりエネルギーが不足して感じられる。いわゆるトンシャリ傾向が強い音であり、ステレオフォニックな拡がりも、とくに前後方向のバースペクトタイプな再現が不足し、音像は割合いに、いわゆる横一列型に並ぶタイプである。

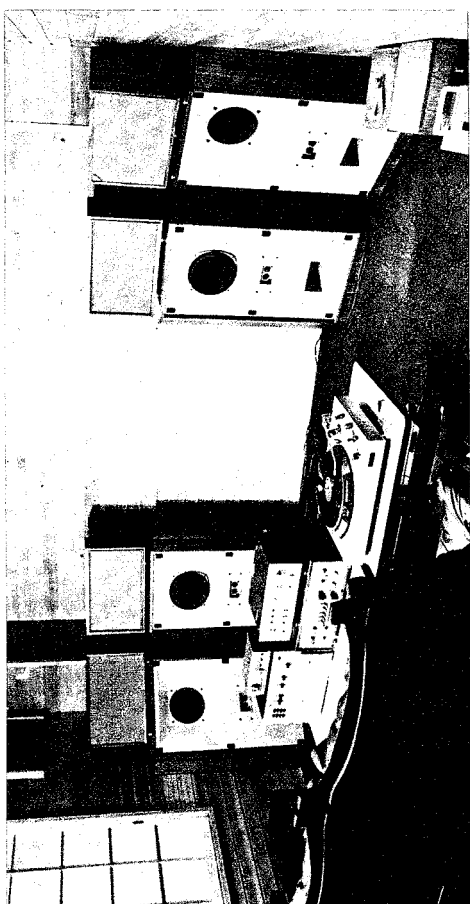
スピーカーシステムの構造としては、フロントホーンの有無だけの差ではあるが、フロントホーンの効果は、ステレオフォニックな空間の再現で両者の間に大幅な差をつけている。オーバートン表現をすれば、一度フロントホーン付のシステムを聴いてしまうと、ホーンのないシステムは聴く気にならなくなるといってよい。つまり、豊かさや負しきの差なのだ。

概略の試聴を終って、次には幻のコーネツタに

的をしぼって聴き込むことにする。このシステムの低域側に片寄ったバランスを直すためには、高域のレベルを上げることが最も容易な方法であるが、実際にはもつともらしくバランスするが、必要な帯域では効果的でなく、不要の部分が上がってしまうのだ。いろいろ手を加えてみても解決策は見出せない。次には仕方なく、ネットワークに手を加えることにする。

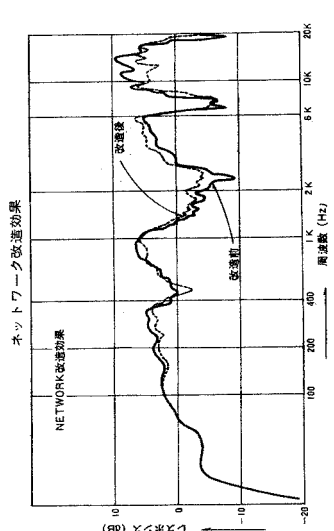
狙いは、高域制の下を上昇させ、低域制の上を下降させることにある。カットアンドトライで決定した値に設定したところ、トリタルのバランスは相当に変化し、鈍い表情が引き締まり、システムとしてのクレイトはかなり高くなる。しかし好みにもよりますが、ローエンドはやや締めた感じである。方法は、パスレフポートをタンプするわけだが、これはかなり効果的で、ほぼ期待したような結果が得られた。補正をしたシステムは、ますますホーンなしのシステムとの格差が開き、ほぼ当初に目標とした音になったと思う。ここまでの試聴は、レベル、ロールオフとも0位置に合わせたままで、特別の調整はしていないことをつけくわえておきたい。

このシステムに使用するアンプは、中域の密度が高く、中低域から低域にわたってソリッドで、クオリティが高いタイプが要求される。少なくとも、ソフトで耳ざわりのよいタイプは不適である。逆に、ストレートで元気のよいものも好ましくない。プリメインアンプであれば、少なくとも80W + 80Wクラスの高級機が必要であろう。

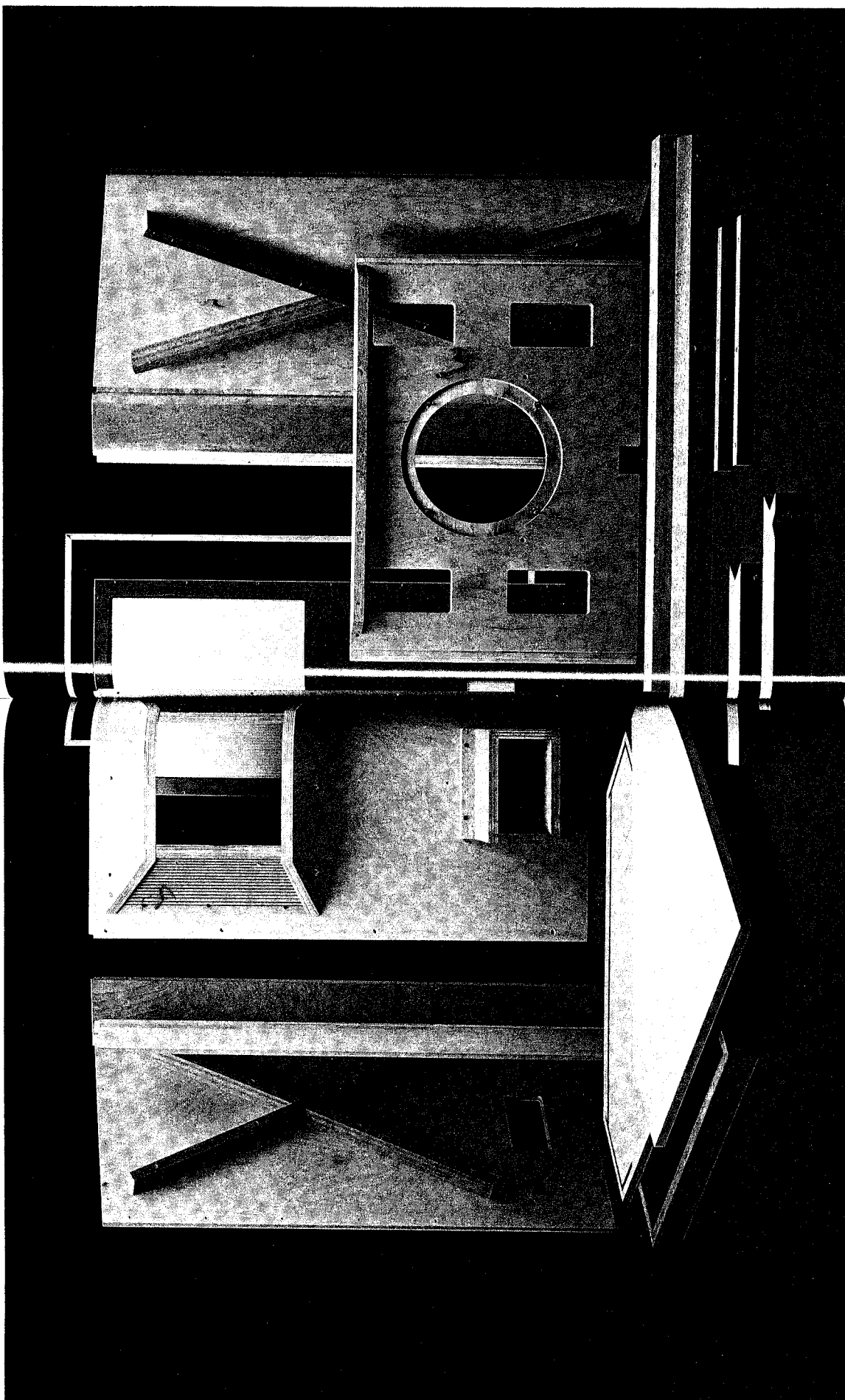


試聴には新田2種のIII LZイン・キャビネット(III LZ MK II入りと295HPD入り)も用意された。アンプはQUAD33+405、ラックシステムSS038FD/IL、デンオンPMA-255等が保われ、カートリッジはエスエレクトロアグワース・ステイティック、オールドフォーン等が主に保われた。

タンノイのネットワークにL・C(288Ωの変異参照、ネットワークのプリント基板に取り付けてある)を追加することによる特性の強化はグラフラフの上ではわずかなものだが、音質の改善は著しいものがある。



MP HANDICRAFT



ついに完成したステレオサウンド版タンノイ・コーネッタ。18mm厚の板含振を使用して、素材のもつ材質感を生かすようにクリアラッカー仕上げにしている。(前頁) 細部の部品を取付けたコーネッタの主要構成部分。各部品の名称は本文を参照のこと。(上)

